動物園飼育モルモットと小学校飼育モルモットを介した連携授業による児童の学びの評価方法例

○齋藤愛子[1)]，松山　薫[1)]，山口進也[2)]，松本朱実[3)]，佐藤真之[4)]
([1)] 横浜市立野毛山動物園，[2)] 横浜市立よこはま動物園，[3)] 社会構想大学院大学，
[4)] 横浜市立権太坂小学校)

野毛山動物園では，小動物とのふれあいを活用した教育プログラムを実施している．2019 年 2 月～2022 年 7 月までは，小動物とのふれあいを休止していた．そのような中，小学校 1 年生を対象に教師と協働して野毛山動物園のモルモット，学校飼育モルモットを介した継続的な連携授業を実施した．この連携授業について児童にどのような学びが提供できたのかを確認することを目的に分析評価を行った．動物園のプログラム目標は「ふれあわないでもできる五感を最大限に生かした自発的な観察を通し，動物に対する知識を深めること，動物の動きやしぐさから気持ちを想像し理解しようとする力を伸ばすこと」，学校の単元目標は「モルモットにくり返し関わり，自分たちで調べて世話をする活動を通して生態，変化や成長の様子について考え，生命の尊さやぬくもりに気づき，これまで飼育してきた人たちの想いを考えながら，モルモットを継続して大切にできるようになる」であった．これに対応させ，評価の視点を「生命概念，科学的思考，動物とのつながり，動物との関わり，持続可能性」とした．児童の発話，ワークシート記述内容を用い，上記の評価の視点で分類して集計した．これらについて共起ネットワークによる分析等から「子どもが自分なりに職員から得た情報などを参考にしたり，視点をもって観察したり，モルモットの視点や気持ちに立ったりした活動や考えが示された.」と全体の学びを評価した．さらに，全データが集まった児童について 1 名ずつ上述の評価の視点を用いて各段階の学びを分類し，色分けして図式化した．これにより「生命概念」「科学的思考」「動物とのつながり」「動物との関わり」「持続可能性」に関わる学びが段階的に高まることが示された．